

### 第3節 中世地下式坑の位置について

西地区で検出した中世に所属する大形の掘立柱建物は、他の集落遺跡（門前町道下元町遺跡、穴水町西川島遺跡群など）で通例的に見られるものとは、柱穴の掘り方や柱間の在り方が大きく異なっているものであった。各種の遺物を包含していた井戸にしても深さ8mを越えるものであり、地形的な条件を透徹した異常なものが感じられる。これらは掘立柱建物に深く関与している地下式坑の性格に起因しているものと推察される。本遺跡内には式内社に仮定されている野蚊神社があり、中地区で検出した第1号掘立柱建物が平安時代に所産しているとの調査成果の延長として、第1章に掲げた18世紀代の古文書に記載されている堂宇が並び建つとの伝承が確認される可能性が高いものと評価できる。

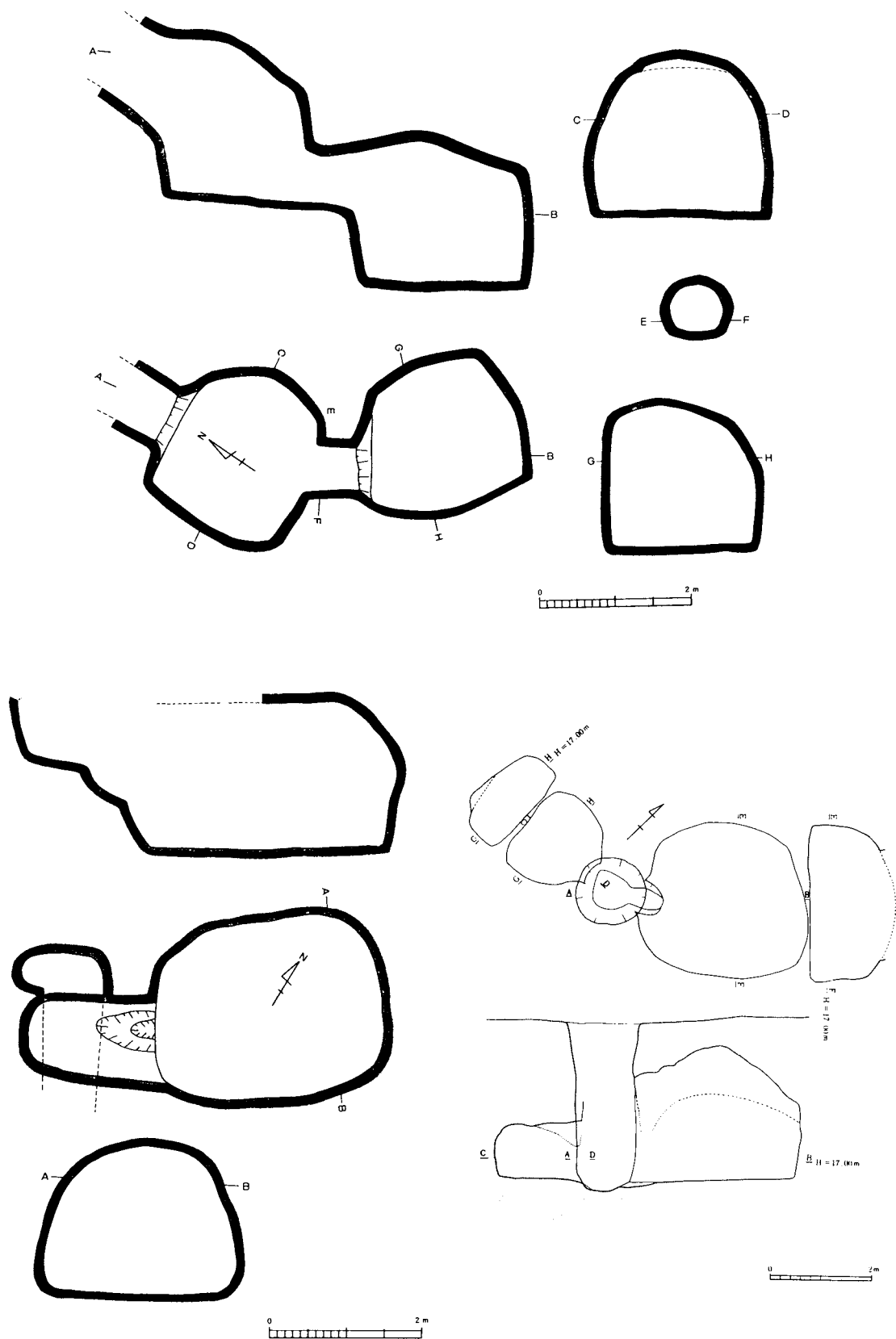
中世の遺物は13世紀代後半に位置づけられる珠洲焼などを含むものの、大部分は15世紀後半代に考えられるもので、一連の遺構の所産時期を示していると考えている。

県下における地下式坑の発掘は本遺跡を含めて7遺跡22基を数えるが、一部を除いては時代を特定しうる遺物の出土がなく、性格を含めて不明の部分が多い遺構とされてきた。

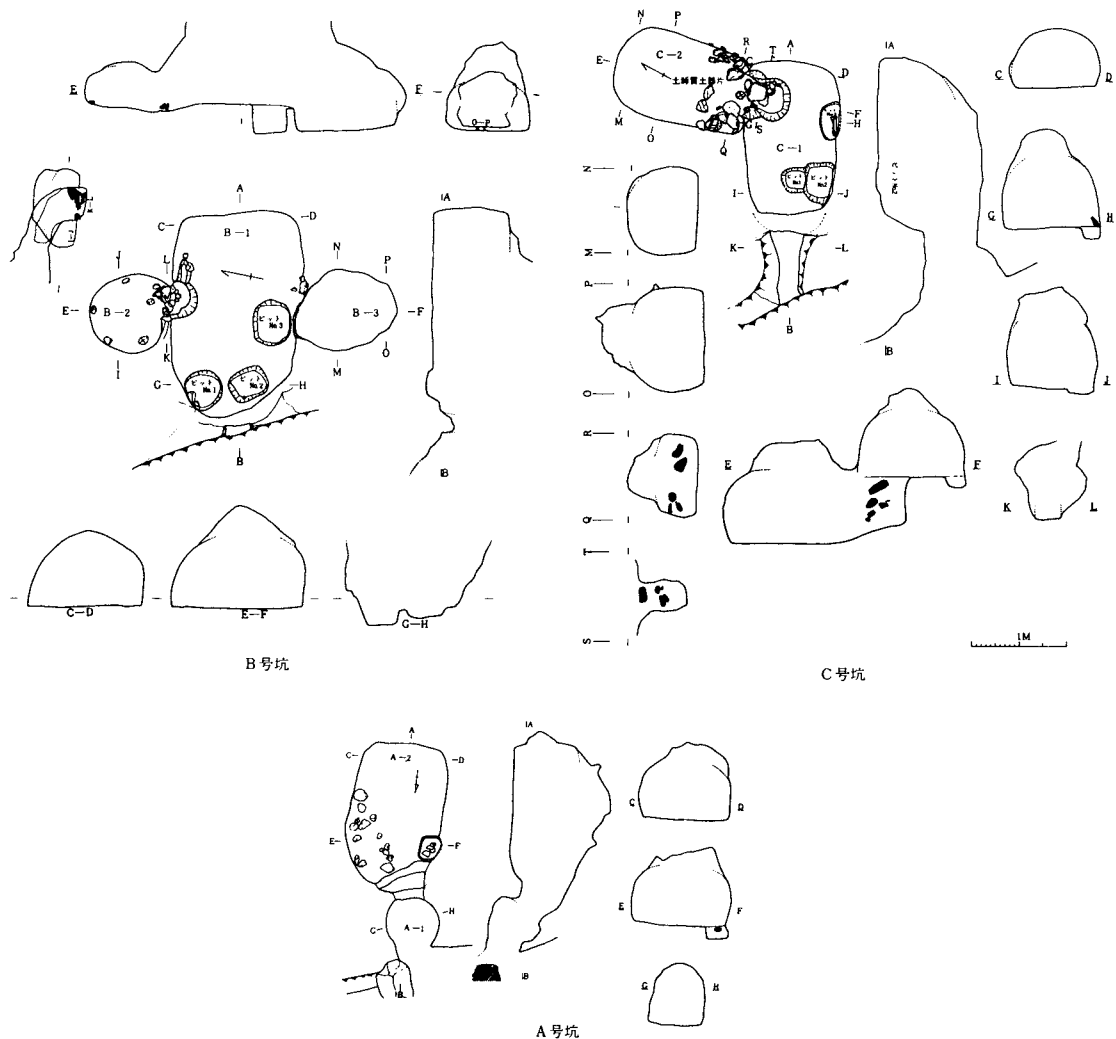
羽咋市柴垣ところ塚古墳に隣接する位置で、羽咋市教育委員会によって6基が調査されている。海岸段丘の高低差のある水田地帯に立地しているもので、4基は工事中に発見された。1号坑は奥壁部の幅が広がる平面撥状を呈していて長径約3m、幅2m、高さ193cmを測る。2号坑は竪穴部と玄室部の高さが異なり階段状の施設が付いている。玄室の平面形は隅円方形を呈し、長径297cm、短径218cm、高さ190cmの規模を測り、竪穴部に小室が作り付けられている。3号坑は前室を付けるタイプで、竪穴部とは段差が付いている。平面は略隅円方形を呈し、長径208cm、短径186cm、高さ196cmの規模をもっている。約1mの段差をおいて不整形プランの奥室が穿たれている。長径199cm、短径178cm、高さ185cmの規模である。4号坑も竪穴と玄室の床面とは約1mの段差が設けられているもので、玄室は隅円長方形を呈していて、長軸318cm、短軸210cm、高さ204cmの規模を測る。工事中に損壊した5・6号坑や天井部が落ちて小池となっているものが知られ、調査担当者の谷内硯央氏は数10基が所在する可能性を指摘している。いずれの坑にも時期を比定しうる遺物の出土は見られなかった。特徴としては入口部と玄室部との間に段が付く、玄室の平面規格がややくずれた形となっていると言える。玄室内では土坑や壁溝、ピットなどは見られず、竪穴部の閉塞においても特別な状況は認められないようである。

志賀町矢駄遺跡は丘陵斜面に作られた5基からなるもので、うち3基（7室）が砂防に係るダム工事に関連して、石川県教育委員会によって発掘が実施されている。A-1号坑は平面円形を呈し、径150×140cm、高さ約110cmを測る。A-2号坑は1号坑の奥壁に掘り込まれているもので、平面隅円長方形を呈している。長さ350cm、幅290cm、高さ165cmの規模で、玄室の入口近くで方形プランのピットが掘り込まれている。B-1号坑は隅円長方形を呈し、長さ約400cm、幅約250cm、高さ約150cmの規模を測り、玄室の入口に小ピット3個が掘り込まれている。B-2・3号坑は1号坑の側壁部に相対して穿たれている平面楕円形をなす小規模なものである。B-3号坑は径200×160cmの規模をはかる。C号坑も玄室が複室となるもので、入口部と玄室部の床面は約1mの段差がつけられている。C-1号坑は平面プラン隅円長方形で、長さ330cm、幅約200cm、高さ約150cmの規模を測る。玄室の入口近くに小ピットが掘り込まれている。C-2号坑は側壁の奥位置に掘り込まれているもので、閉塞状況を推定させる礫が散乱している。平面形はC-1号坑に類似している。長さ約280cm、幅約190cm、高さ約160cmの規模を測る。出土遺物は天目と土師質土器が各1点づつで、調査担当者の中島俊一氏は閉塞状況や小ピットの在り方から、中世の横穴墓として位置づけられている。

小松市津波倉ホツジ遺跡は、法燈寺跡との伝承のある地域で、宅地造成工事によって地下式坑6基が発見され、2基については北陸大谷高校地歴部が調査を実施している。1号坑は複数の玄室を穿つもので、竪穴部には閉塞石が積み上げられていた。前室は平面隅円方形を呈し、長さ150cm、幅120cm、高さ120cmの規模である。奥壁の上部に小室が作られている。後室は前室の側面に掘り込まれているもので、不整形プランを呈し、110×120cm、高さ約80cmの規模を測る。2号坑の玄室は平面隅円長方形を呈し、約160×120cmの規模を測る。1号坑か



第160図 県内発掘の地下式坑(羽咋市柴垣ところ塚・加賀市天神山遺跡)



第161図 矢駄遺跡の坑

らの出土遺物には美濃窯の鉄釉天目や香炉、越前焼などがあり、15～16世紀代の年代が推定されている。以上の他には、羽咋市寺家ブタイ遺跡、加賀市天神山遺跡群D2調査区、加賀市美岬町千崎地内でそれぞれ1基づつが知られている。これらを本遺跡の4基の地下式坑と比較すると、平面的な規格が強く打ち出されていることや壁溝や玄門部のピット、土坑の存在などに相違点が指摘できるが、基本的には同一の性格をもった遺構として考えられる。

地下式坑は明治年間から知られているもので、江崎 武氏の研究によれば九州や関東を中心にして全国に700例以上の発見がある。半田堅三氏によって形態分類がなされている。江崎 武氏は地下式坑の少ない伴出資料から14世紀前葉から16世紀中葉にかけての時期に位置付け、一定の経済的基盤をもった有力者で、限定された葬送観念をもった集団の土葬墓と推定されている。

さて、掘立柱建物と第3号地下式坑は同時期に造営されたものと考えられ、本遺跡内での展開は把握できないものの、一定の地区を墓域として設定しうる力をもった有力者の存在が想定される。掘立柱建物で宗教的遺物の出土は認め難いものの通例の集落址とは考えられず、墓守的な草堂として推定しておきたい。発見した地下式坑は4基と小数であり、血縁的であるか地縁的であるかの内実を考えるのは今後の課題である。県下においても中世には積石墓から土葬墓までのかなりの幅をもった墓が検出され現代的には複雑な様相を示しているが、宗教、地域と年代を区切った形での研究が求められていると言える。